

記憶をつなぎとめる「鍵」となる。

ファッションや香水など、ヨーロッパを中心としたラグジュアリー文化の専門家である中野香織さん。香水愛用歴は半世紀以上という香りのプロに、香水との思い出や使い方のコツを伺った。

photo: Shuhei Shino
styling: Ryoko Yamazaki
hair/make-up:
Miduki Sato (@sotomiduki)
text: Nanko Arai



中

野さんが、香水を初めて使ったのは幼少期。母親のドレッシングに惹かれた。でも、やがてオイルのデオリシモをこつそりと足首に思はせるような少女だった。長い香水歴を持つ中野さんの過去を香りで辿ってみると――

「プリスタリブタイプ」のクレータスなら人学時代。時はバブルで女子大生はルイ・ヴィトンを持つような時代でしたが、当時の私は、人に分らないもののはうが素敵」と香水に傾倒してしました。そんな青臭い自分には戻りたくないの、今はその香りとは距離を置いていますか。笑」

そんな甘酸っぱい記憶もあれば、離した思い出が蘇る香りも。

「20代・30代は海外に行く際に免税店で香水を買うのが儀式みた



いでした。渡航先に合わせて香りを選んで、旅先ではずっとその香りの例えは、エルメスのカレッシュはイギリス留学時代。今でもその香りを嗅ぐと、ロンドンの盛大や湿った空気が鮮明に蘇ります」

年齢、場所、気分、会う人によってさまざまな香水を使ってきたという中野さん。香水選びの基準や使い方のコツがあるという。

「よく使うのはバラやシトラスベースのもの。バラならフレデリック・マルのポトリートオブアラディーやセルジュ・ルタンスの鉄塔の娘。シトラスであればアクアディ・バルマのロゼニアイルプロアモ。気温や湿度によって香り方が変わるので、季節によつ



中野香織

1970年、東京都生まれ。ファッションデザイナー、スタイリスト、香水愛好家。1990年代から香水の魅力を発信し、数々の雑誌やテレビ番組で活躍。現在は自身のブランド「中野香織」を運営し、数々の香水を発売している。

香水は人生をロマンチックに生きるための道具



1.手のひらにプッシュした香水を肩や首の裏側に蒸ばせる。2.現在、中野さんがヘビーユーザーとして
しているエルメスのパレニアなどの香が。3.中野さんがお好きな日本の香水「ムラファン」のボトル。

で合うものを選びます。

香りは場を作る力があるので場所によっても使い分けます。例えば、ビジネスなど真まっただ場であればクリードのアバントゥースのようなリッチでクラシカルな香り。

でも一番重要なのはどう香らせるか。レストランでは料理の邪魔をしないように足元にはんのかしとか、男性はジャケットやコートなどのタグにちょっとなつけるくらいが素敵ですね。

身につけない日はないほど日常のひとつだという中野さんに、香水をつける意味を聞いてみた。

「ボジティブに記憶をつなぎとめてくれる贈り物でしょうか。香水はなくても生きていけますが、あったほうがよりロマンチックな人生を送ることができる。平等に与えられた時間をより深めてくれるのが香水だと思います」

目には見えないけれども、視覚以上に人の心と脳裏に静かに刻み込まれる香りの記憶。その存在の大きさに気づいた人にしか見えないう、豊かさがあるのだと実感した。